

2005年度 LORC 第1班 第2回研究会 議事録

日 時：2006年1月14日(土)

13:30 - 14:30 第1研究班研究会

14:40 - 17:00 地域公共人材像WGとの合同研究会

場 所：キャンパスプラザ京都 龍谷大学サテライト教室

出席者：小山善彦(バーミンガム大学都市地域研究センター 客員講師)

柏 雅之(茨城大学農学部 教授)

木原勝彬(ローカル・ガバナンス研究所 所長)

白石克孝(龍谷大学法学部 教授)

園田正彦(三井物産戦略研究所国土・地域振興室 室長)

中林 浩(平安女学院大学生生活環境学部 教授)

山口道昭(立正大学法学部 教授)

的場信敬(LORC 博士研究員)

辻本乃理子(LORC RA) (50音順)

議 題：第1研究班2005年度および2006年度の研究活動について

地域公共人材像の検討(地域公共人材像WGとの合同研究会)

配布資料：第1研究班2005年度および2006年度の研究活動について(白石)

内 容：

<白石班代表より説明>

1. 研究員の異動

新研究員の紹介

柏 雅之(茨城大学)農村地域を中心とした地域再生、特に条件不利地域の地域再生問題。農業と環境政策。日本でいうと中山間地域や過疎地域の再生。地域資源の管理。

中林 浩(平安女学院大学)都市計画学。社会の活力をいかに引き出すかという視点でまちづくりのあり方を学んだ。公と民の組織の問題について考えている。

当日参加研究員の自己紹介

逢坂研究員は共同研究員を辞退

2. 今年度の今後の計画

シンポ・研究会

1月20日、21日 国際シンポ&ワークショップ

2月~3月 第3回研究会(地域人材像WGと合同研究会&第1班打ち合わせ)

3月13日~15日 日韓合同シンポジウム(ソウルにて)の予定

13日午後ワークショップ

14日シンポジウム

15日エクスカージョン 午後帰国

テーマ：「中央政府における市民参加」

1月20日に詳細を韓国側と詰めていく。わが国はある意味後発国であるので、いくつかの国や発展途上世界のことも含めて、最初に言及したり触れていく予定。LORC側としては、日韓の比較や教訓の学びあいに力点をおきたい。日韓両方がゲストおよび発表者をたててシンポジウムとして開催。ワークショップについて、開催形式等韓国側に任せている。韓国側の研究者・実務家を招聘し開催。最終的なシンポジウムタイトルは詳細が決定次第報告。年度末であるので、参加意向を事前にお伺いしているところ。

### 東京農工大 COE と「生存科学」をテーマとした共同研究打ち合わせ

堀尾先生からは時間をかけながらもやっつけようとして共同研究に積極的な意向。

出版関係

昨年11月に2005年1月28日開催三重県シンポジウムのブックレットを発刊  
今後発刊予定のブックレット（今年度から来年度初頭にかけて）

#### ・「英国における地域戦略パートナーシップの挑戦」

LSPの紹介と昨年1月に開催したLSPシンポジウムの講演記録をまとめたもの

#### ・「環境自治体へのアプローチ：ローカルアクションの手引き」

ICLEIヨーロッパ事務所が出している文章をピックアップし、日本語訳したものとEUとICLEIの協働活動がどうなっているかEUの環境活動がどうなっているかなどを書き加え、オルバー憲章（都市の持続可能性への宣言のようなもの）の本題部分の翻訳で構成。ヨーロッパでここ10年くらいの間でどんなことが行われてきたかを見ながら、ローカルアクション21を自治体はどのように進めようとしているのか How to 部分や表も含めて翻訳し執筆。ほぼ完成している。

#### ・「ローカルコンパクト（地域協約）とは何か？」

イギリスで行われているボランティア組織やコミュニティ組織、自治体、政府との協約、盟約をさしている。それを紹介。昨年バーミンガムで締結されたコンパクトの議長をされていた Spencer 教授が来日された時の研究会資料、いろいろな情報があるだろうということ。で出したいということ。

2冊分の予算がとれたので、できるところから出版する方針。

三重県のプロジェクト

包括助成金型地域予算制度の導入へのサポート

年度の前半でサポートする予定だったが、県の事情で後半になった。現在条例案がまと

まった段階へ。次は市町村間をどうするか、三重県はどうするかという具体的な話になってきている。

### 3. 来年度の計画（白石案）

#### 調査研究

#### ・4月末～5月初め ICLEI ヨーロッパ本部、同日本事務所との欧州合同調査

自治体職員は移動があるが、ICLEIはそのようなことがないので、ICLEIと連携を強める意味も含めて合同調査。ICLEI ヨーロッパ本部がフライブルグにあるので表敬訪問としてフライブルグともう1都市、環境先進国出ないところで悪戦苦闘しているところ。われわれとしては政策システムを開発するのが目的であるので、新しい地域や自治体内でのチャレンジをしているところ調査したい。今度世界大会があり参加してくる。ヨーロッパ事務局長とお会いし話を詰めてくる予定。

#### ・9月前半 地域再生と地域戦略パートナーシップについて英国調査

昨年、小山氏にお世話になり中山間地域の地域戦略パートナーシップについて調査。そのまえにこちらがゲストをお呼びし、5月にはリバプールに行って、都会の地域戦略パートナーシップについて調査した。最後それを総括するぐらいのところまで本を出版しイギリスの話に決着をつける。

LORC 全体のことであるが、可能性としてスリランカ調査。もともとの計画調書では4班を中心にスリランカで新しい試みや状況について国際交流や社会実験をする予定だった。しかしスリランカの不安定な社会情勢や津波の影響があり、現地受け入れスタッフもいるため、受け入れ可能か今年の4月か5月に再検討。場合によって11月くらいに調査研究として何人かがスリランカに行くかもしれない。

#### ・地域連携による政策開発システム実証研究（三重県と高島市）

三重県の地域予算を活用した市町村の取り組みの支援（東京農工大 COE との連携）予算が取れればということ。

高島市は二段階でのサポート。まず参加協働型の公共政策システム・人材育成、職員研修について。その次にバイオマスや食育について事業を連携していく。高島市は人材育成や職員研修に予算をつける準備中（政策デザイン WG との連携）<ここまで30：14>

#### 出版計画

最終的なLORCのアウトプットはいくつかあるが、日本語としては次の通り。

「LORC 叢書（全3巻）」日本評論社の順次発刊

その他、出版にかかわる助成が必要な案件は？

なおLORC 叢書の出版計画については今年度中に原案を表示し、みなさんの意見をあおぐ。第1巻については「認証評価システム」で原稿が出来上がっている。LORC 叢書の全体像ができた段階で出版される。

「英国の地域再生」学芸出版社の刊行。

この間調べたことをLORC叢書に入れることはありえないので、せっかくいろいろやったのであれば、現代の地域再生ということでグランドワークの人に来ていただいたところからLORCのシンポは始まっているので、いろいろ多面的なところでまとめていけばよいかと思っている。

ブックレットについての提案は？その他、LORCが出版にかかわる助成を出せば本になるなど、全員がLORCの研究者である必要はないが、そういうものがあれば。

出版計画と調査計画等について、みなさんがお持ちの計画があれば、知らせていただきたい。その他、シンポジウムやゲスト招聘など提案があれば出していただきたい。質問がなければ、来年の班活動についてご提案いただきたい。

来年の予算枠を取る必要があるので、1月27日までにご提案いただきたい。

#### 【質疑応答】

(木原)

出版助成とはなにか。

(白石)

出版助成とは本屋に対して部数を買取するというのが一般的な契約のやり方。LORCのブックレット、ローカルガバナンスシステムシリーズという名前。

(柏)

単著の補助は出ないのか。

(白石)

一応共同研究になっている。基本的にない。ブックレットは単著でもよい。このレジメには書いてないが、アジア・アフリカ研究、発展途上世界を研究をしているグループを中心に、英文でエスペンシャルをとるような本を外国の出版社から1冊出版する予定がはいつている。もしもそういうところで一緒に仕事がしたいという要望があれば、出版の方向がでた段階でお知らせする。

(柏)

いつまでの事業計画なのか

(白石)

残り2年間。しかし文部科学省からの但し書きがあり、最終年度の10月までに終わらせることとある。この文書に対して、10月までに出版を終えなければならないのか、すべての予算事業が終わって、出版の買取まではするが、発刊は12月でもいいのか、その辺はまだよくわからない。少なくとも予算の執行などは10月までとなっている。夏休みの前には原稿が終わってないと少し厳しい。

オープンリサーチセンターとは、地域や社会との連携をどうするのかというのが一つの柱になっているので、必ずしも学術的なことばかりが望まれているのではない。そこがC

OEとはだいぶ違う。研究成果を出しながら、もう一方で地域や問題を内包している社会とどのようにリンクするのか、われわれとしては2種類のアウトプットを用意しないといけない。実践的ではあるが、若干研究としても耐えられるものを叢書とし、他はもっとちがう読み物を書いてもいいし、運動をやってもいいし、ブックレットにしてもいいという発想。

(柏)

農村と地域ということをはからめてあとは少し検討していただきたい。

一つは白石先生が入ってもらっていた3年間の科研のプロジェクトが終わった。公民パートナーシップ形の農村ガバナンスというシステムをどのように構築するか、東京農工大出版から今年出版する。本のタイトル「公民混合農村地域経営論」要するに農村パートナーシップ論。

農村ガバナンスの問題をきちっと整理していくということ、それが一つ。

2番目は、ニューカッスル大に農村交流センターがある。その所長が早稲田の建築の後藤春彦さんのところと連携している。連携のもと後は藤さんが取った科研A。それがそろそろおわる、その仲介役をやっていたPDの人イギリスに戻る。研究が切れるかもしれないので次の研究相手を探している。こんど4月からニューカッスルでPh.Eを取ったが京都大学出身の女性人が茨城大学にPDでくる。彼女が日英の仲介役で、日英韓の、日本のみならず、もう少し広い形での東アジアで考えているので、韓国での受け入れ先は韓国農村経済研究院と連携をとってやっている。日英韓の農村ガバナンス、農村の持続的発展と農村ガバナンスというイメージでやりたいと思っている。それにぜひLORCが中心的に入ってくれたらうれしい。

(白石)

海外との連携についてはLORCの中でちゃんとパブリックに連携できるか形になるとLORCを超えることになるが、それを含めて龍谷大学としては考える必要がある。そのチャンスとか可能性はあるだろうと思っている。

LORCとしては企画なり何か交流なりを設けたいと思っているので予算を含めて検討する。ただ、叢書の話をしている中でどこまでアウトプットをしていくか、園田さんが言われたように、具体的に地域でこうすればいい、ああすればいいとかまで煮詰めていくのは難しい。場合によっては不可能な課題かもしれないし、あるいは個別のどっかの政策をいろいろ列挙すればなにかいい提案があるわけではない。われわれのタイトル「地域公共政策開発システム」。つまり新しいタイプの地域公共政策システムをどうやったら開発していくことができるのか。その中には担い手がどうあったり、どうなっているのかとか、どうやったらそういう発想アイデアにたどり着くのか、つまり政策のアイデアにたどり着くのか、それを刺激したり開発したりするような制度やしきみやきっかけがどこにあるのかというところにある程度おいた形のまとめをしたらよいだろう。そうすると先ほどニセコの話をするれば、行政がどのように新しい公共政策開発システムをやっていくのか。「情報公

開」や「基本条例」そういうツールみたいなものが新しいイノベティブな動きにつながっていったわけであるから、ニセコ状況をまとめて紹介するとか、自治体のあり方として紹介するのではなく、そういう地域の公共政策開発システムとして情報公開というツールとかあり方がこういう形にインパクトがあったのではないかという形で、切り口をそれぞれのところ、例えば英国のLSPであれば、マルチステークホルダー、マルチパートナーシップスタイルで物事を進めていくことによってどのような成果を生み出そうとしているのかみたいなのところにむしろ紹介の力点をおいて、その成り立ちや具体的にどういいうアウトプットがでているかみたいなことにあまりそこへ力点をおいたものを叢書に置いていくと論文集になってしまうので、基本的に政策をつくる新しいシステムのきっかけになるようなアイデアをいろんなところにこめようではないかというところがある。ただし、先ほど本の話をしたが、その中である一定の到達をつくれということは出てくると思う。分野ごとや国ごとやテーマごとに。それは叢書とは別の形できちんとしたものにする。仕事がみんな同じ濃度で進むわけではないので、叢書と単著とは区別して方がよいのではないかというのはそういうところ。今、柏さんの話していくと、アウトプットとして学術的にどこまでがやらなければならないのかという問いまで含まれているならば、必ずしもそれを全部やって残りの1年半のうちに何か立派なものを作らなければならないというものではなくても、とっかかりの部分がいくつか確認できるという段階でもいいのではないかという気持ちがある。

(園田)

自分がかかわってきたのは農村地帯など地方自治体。市町村、市でも町村に近いもの。県とも政令市とも違う。ターゲットをしぼらなくてはならないのではないかな。最後に収集がつかなくなるのではないかな。

(白石)

昨日成果をつくる話をしたときに、巻頭言にもあたるのだから、なぜ、地域ということの問題にしたのかということについて、もう一度きちんともう一度議論しようということはお話した。おそらく府県や広域ではなく、もう少し小さいところ。農村と都市は両輪で書かれるとおもう。その場合、東京のようなメガシティではなくて、普通の中核的都市クラスのものだろうとイメージしているが、いずれにしてもわれわれが対象にしているような地域みたいなものについて、ただ「地域」という言葉ではなく、なぜどこをというイメージづくりについてはもう少しきちんと設定しなければならないだろうということになっている。各巻の巻頭言にきちんと書くつもりでいる。そのあたりも今年度中に「叢書としてはこういう形にしてみたらどうでしょうか」という第一次提案をみなさんに出すときには、意識して書かれると思う。園田さんの言われるとおり、その部分を大雑把にすると収斂しない。

(園田)

将来一番困るであろうところをターゲットにしたらいいかもしれない。

(白石)

そうですね。困難な問題を抱えている都市地域、困難な問題を抱えている中山間地域、あるいは発展途上世界で困難を抱えている地域というニュアンスで僕も基本的にはいけると思っている。

メールでかまわないので、あと2年間にどういうことができるだろうか、内容と予算を含めてご相談いただければと思う。

#### 4. 地域公共人材像 WG との合同研究会

話題研究者：山口道昭先生

記録については、地域公共人材WGより報告

以 上